

“おかね”を語る

お金をどうしようかと思っていた。

今から二十年以上まえ、大学を卒業するときのことである。ぼくはとても企業では通用しないだろう。そう早合点して、新卒の就職戦線を勝手に離脱。ひとりで生きていくことに決めたのだ。

でも、生活していくためには資金が必要である。そこで目をつけたのが株式市場だった。好きな本を読んで、のんびり暮らす。それには資本市場から直接資金を引っ張ればいい。なんとも無謀な二十二歳だった。

ときはフリーターという言葉ができたばかりのころ。肉体労働のアルバイトと家庭教師をかけもちして、月に二十万円ずつの貯金が始まった。同時に図書館の経済学経営学の棚を片端から読み潰していく。株式投資には新聞が最も役立つとあったので、朝日と日経を毎日二、三時間かけて全項目読破。スクラップブックをつくるようになった（これは現在も続いている）。気になる銘柄のいくつかは場帳をつけて、株価を追いかけていた。

今思うと、そういう作業がすべて創作のうえでも役に立っているのだから、目的はなんであれ勉強はしておくものだ。例えばこの春の日経平均の急落 新興国

「金」のイメージ

石田衣良



市場のマーケットの暴落を見て、資金の出し手である欧米諸国へ資金の大還流が始まったと、すぐにわかるようになる。世界の資本市場でおおきな潮流の変化が起きたのだ。金の流れというものが、女性たちのファッションと同じで、社会の変化を敏感に映すものだと感じられるようになる。経済のおもしろさというのは、これなのだ。

ぼくたちは自分たちが住んでいる社会がどういう場所か知らない。同時に明日のこともまったくわからない。けれども資金の流れという形で、社会全体の健康の具合や病気のありかを予測することは

できる。世界を生きるためのひとつの窓が、金の世界なのだ（もうひとつ大切なのは恋愛や男女の世界です）。

とかく日本人は、金は汚い、金をほしがるということとは下品だと思いたがる。これでは勤勉と貯蓄が神へ至る道だと信じる欧米諸国と、太刀打ちできないとばかりは思う。海外投資のリターンが財・サーピスの貿易黒字を超えた今、日本には優秀な投資家が多数求められているのだ。世界有数の富める国になった日本人が、金というものをどう捉え直すか。新しい富の価値観が問われている。



いしだ・いら 作家。1960年東京都生まれ。1997年『池袋ウエストゲートパーク』でオール讀物推理小説新人賞を受賞しデビュー。2003年『4TEEN フォーティーン』で直木賞を受賞。